

ラスト・ダンス

(創世記二二・一〜一九)

一九九八年六月一四日。ユタ州デルタセンターは熱狂に包まれていた。無理もない。シカゴ・ブルズの二度目の三連覇がかかった敵地での一戦なのだから。一進一退の攻防が続いた熱戦もあと一〇秒で終了というその時、すでにベテランになっていた「彼」は敵のディフェンスの右に突進、相手の体を完全に崩してから飛びあがった。ジャンプシュートだ。美しい弧を描いてボールはゴールに吸い込まれる。ご存じ「バスケットの神様(ー)」マイケル・ジョーダンの「ラスト・ダンス」の最終章である。恐るべき身体能力でもぎ取った最初の三連覇もすごいが、彼のプレイヤーとしてのクライマックスは間違いなくここにある。

閑話休題。今朝の個所は間違いなく信仰の父アブラハムの人生の頂点に位置する出来事である。以下、彼が得た祝福の秘訣を三つ学びたい。

一、「理不尽」ではなく「試練」

約束の子イサクはすくすくと育ち、

周辺民族との関係も保証されたアブラハムに対して神は「あなたの愛しているひとり子イサクを人身御供(ー)にせよ」と命じられた。実に理不尽な命令である。人殺しは十戒に反しているし、聖書の神は異邦の人身御供の風習を忌み嫌う、更にイサクは約束のひとり子、かけがえのない存在だ。だからこれを神の「理不尽」卑近な言葉で言えば「無茶ぶり」なものとして解し、アブラハムの心情に共感したくなる

ことがしばしばある。しかしそのような「読み」は著者の意図するところではない。なぜなら、一節において著者はこの事件を神の試練として定義づけているからである。勿論この時点でアブラハム自身が「これは神の試練だ」と明確に思っていたかどうかは確かめる術はない。しかし創世記の著者やヘブル書の著者がこの個所を「試練」として理解するよう私たち読者に求めていることは尊重されるべきなのである(参：ヘブル一・一七)。

二、「思索」ではなく「行動」

この神の命令を聞いた時、アブラハムはどうしただろう。神の「無茶ぶり」に腹を立てただろうか。或いは神に文句を言うべく、この命令の非合理性について思索しただろうか。そうではない。寧ろ三節にあるように彼は淡々と行動した。ろばに

鞍をつけ、薪を割り、それをろばに載せて、彼は神の命じた場所へ旅立った。学者たちはこの個所の書き方が二二章一節からの記事に非常によく似ていることを指摘しているが、そう考えるとこの時のアブラハムの神に対する従順さはあの時と同種のものだと言える。いやそれは様々な経験を通してますます強化されたものだと考えるべきである。前述のジョーダン氏は行動の人であり「何よりも怖いのは何も始めないことだ」と言っているが、アブラハムもまた神の命令を命令として受け取り、その通りに行動したのである。

三、「疑念」ではなく「確信」

とはいえ今回の神の命令は人間の常識を越えている。だから「一体どういう気持ちでアブラハムはモリヤの山へと歩いていったのだろう」と考えるのは自然である。この問いを解くカギは二つある。一つは五節である。日本語の聖書ではわかりづらいのだが、英語で読むとここは「私と子どもとはあそこに行つて礼拝をし、そして**私**たちはあなた方のところに戻ってきます」となっている。そう、アブラハムはひとり戻つてくるとはこれっぽっちも思っていない。あくまでイサクとともに戻つてくると告白しているのだ。更に八節には、犠牲の動物がどこにあるのかを尋ねたイサクに対

し、アブラハムは「イサク、神ご自身が全焼のいけにえの羊を備えて下さるのだ。」と断言している。このように考えると、アブラハムにはこの時点で相応の確信があったと考えてよい。(参：ヘブル一・一九)。勿論彼はイサクがどのように助かり、どこから犠牲が供給されるかは知らなかった。だが彼は偉大かつ善なる神にして彼を祝福し続けてきた神を体験していた。だからこそ彼は疑念ではなく確信をもって前進することが出来たのである。

* * *

モリヤの山に着くなり、老いたアブラハムは祭壇を築き、その上に従順な青年イサクを載せ、渾身の力で刀を振り上げた。その刹那、彼は天の声を聞く。そう、彼は合格したのである。徹底的に主に聴従し彼はまたも大いなる祝福を約束された。友よ、人生の試練において行く道は二つだけだ。神の命令を厭い、行動をせず、疑念を深めて不合格に終わるか、はたまたアブラハムのように神のことばに全く従順になり、確信を深め、結果としてより多くの祝福を得るかの二者択一なのだ。「ラスト・ダンス」をモノにする選択権はあなたにある。信仰の父アブラハムの姿を見、その信仰にならない、共に祝福への道を歩もうではないか。アーメン。